人間—汚濁と輝き

岡城祭りのころ、豊肥線豊後竹田行きは始発駅から満員。私の横の空席にバッグが置かれたまま。それに視線を送りはするが、だれも座る勇気はない。明らかに前に陣取る女たちの仕業である。電車が動く。立っている初老の婦人に、私は「ここに座りなさいよ」。しかし、もじもじ。「空いているよっ」。やっと荷物がどけられた。

反対側のボックスも同じく空席をとって、同じグループがペチャクチャ。さすが私も席整理屋ではないから、そこまでは口を出さない。三つめの駅、中判田から乗って来た仲間に、「ここっ、ここよっ」。叫びに応じてかきわけて来て、したり顔で座る女。何と、この連中三つ駅まで空席にし続けていたのである。

座りたいのに、座れるのに、座る権利を主張できないこの大勢の無気力さは、いったい何だろうか。民主主義はまず権利の上に眠らないことだ。ファシズムの黒波がこの国を洗い始めている。だのに、そんな怯懦さでは、あなたたちの子は守れない。

カルチャーグループらしいこの女たち一味の行為は、ヤクザより劣る悪質なもので

あることに気づくべきである。ふつうの人間のすることではない。

さて、わが家でのこと。ある夜、二人の子づれ夫婦が同居の息子を訪れた。ケーキ箱を持って私たちの部屋に来た姉弟の幼児が言う。「これおあがり」。老妻は箱をあけ、「おいしそう。好きなものをお二人先におとり…」。箱の中を探すようにしていた男の子が、「おばちゃん、これおいしいよ。これたべなー」と指さすのである。思わずその顔を見た。大きなひとみが宝石よりも輝いている。私たちはこの子のいう通り、二つを先にとり、子らに箱ごとあずけた。この子の頭も胸も愛だけがいっぱい。その名は足立和宏君。年は何とまだ二歳。

（一九八八年二月十六日）